

幼児期における自由で創造的な身体表現活動における題材の検討

鈴木 裕子

I. 問題と目的

自由で創造的な身体表現活動を、子どもにとっても、指導者である保育者にとってもより楽しく有効に行うために、保育者はまず題材を選択し、その題材に対する身体表現としてのねらい検討し、どのような内容を展開させるかを考えなければならない。そこでは身体表現活動の特性として、イメージの膨らませ方と表現的な動きの開発¹⁾という両側面が互恵的に作用し、表現技能が高まるような題材や内容を選択することが求められる。また、本活動における保育者の援助は、押しつけであっても放任であってもならない。子どもが自由で創造的となるためのきっかけを与え展開させるための具体的な志向は、まず題材の選択に始まる。

そこで本研究では、幼児期の身体表現活動を援助する基礎資料を得るために、その活動に適した題材を検討する。身体表現活動の題材に関する研究として、実際に行われている題材の傾向²⁾や、個々の題材を通してどのような身体表現が行われ、どのような意義があるのかを検討した事例研究³⁾⁴⁾がみられる。また、一般的には、発達の段階にともなって、動物や乗物などの身近なものから、気持ちなどの抽象的なものへと広がっていくことが望ましい⁵⁾とされ、その理解のもとに、保育者は子どもの生活状況に沿って様々な工夫に努めている。一方、一回性の強い子どもの身体表現という活動では方法論が体系化されにくく、指導内容や方法は保育者自身の裁量に委ねられる部分が多い。それが本活動の醍醐味でもあるが、苦手意識を持ち敬遠する保育者が多い要因ともなっている。保育者が具体的な志向を持って取り組むことができるようにするためにも、幼児期の特性や発達を踏まえて方法論を体系化することが必要であろう。端緒として、題材選択のための指標として、題材の難易度を検討することとした。そこでは保育者の積み上げた良い実践を対象とし、そこに埋め込まれている理論を取り出す方法で検討を重ねていくことが、実践への還元として有効と考えられる。

古市⁵⁾は、表現に関する理論は、子どもが表現するプロセスという状況に埋め込まれており、そこでは、個人的な変数と、環境的な変数が混じり合って、表現が構築されると述べる。そこで本研究では、題材の特性を、環境的な変数と個人の変数とのかかわりから検討することとした。個人の変数として、性、身体表現を行うための基礎的な力、各題材における身体表現の評価点を要因とした。環境的な変数として、各題材における保育者の表現のねらい（以降、モチーフと称する）を要因とした。それによって、どのような題材に対して、どのような子どもが、どのような身体表現をすることができるのかを検討し、題材の難易度を明らかにする。なお本稿では、5歳児のみを対象とし、年齢による発達の変容は次の機会に送る。

II. 研究方法

身体表現の実践「カタツムリ」「顔」「たまねぎ」を収録し、それぞれのテーマにおいて題材を抽出し、各題材のモチーフ、言葉掛けのキーワードを命名し、題材の特徴とした。また対象児個人の特性

として、a. 身体表現を捉える観点における評価点、b. 性、c. 身体表現基礎力を示した。

1. 対象とした身体表現活動

(1) 対象児：愛知県 0 市私立幼稚園 5 歳児 A クラス 31 名（男児 17 名、女児 12 名）

(2) 対象とした身体表現活動のテーマと実施日

・カタツムリ（2014.5.21）：15 分間

保育室内でカタツムリを育てた経験を基に、そのカタツムリを見ながら表現した活動。

・顔（2014.6.4）：8 分 30 秒間

前日以前の複数回の絵本の読み聞かせの経験を基に、その絵本を見ながら表現した活動。

・たまねぎ（2014.6.4）：17 分間

たまねぎを育て収穫した経験を基に、その経験を思い出しながら表現した活動。

(3) 収録の手順

当該園は、保育内容として 3 歳から日常的に身体表現活動を積極的に取り入れている。本研究で対象とした 3 つの活動は、担任教員の保育計画に基づき、子どもの日常の経験に沿って実施されたものである。担任教員の援助のもと、遊戯室または保育室で、クラス全員で行う活動であった。映像は、一人一人の子どもの様子をできるだけ他児との重なりがないように捉えるために、3 台のビデオカメラで異なる方向から撮影した。担当保育者は専用のマイクを付け、保育者の言葉掛けと映像を連動させて収録した。

(4) 身体表現の題材、モチーフ、言葉掛け（表 1）

表 1 身体表現の題材、モチーフ、言葉掛け

テーマ	題 材	モチーフ	言葉掛けのキーワード
カタツムリ	①干からびたカエル	感覚描写	どんなふうになるの
	②元気なカエル	運動表現	どんな動きをするの
	③干からびたカタツムリ	構成と処理	どんなふうになったの
	④元気なカタツムリ	運動表現	どうするの
顔	⑤顔のパーツ	運動表現と空間形式	どんな形なの
	⑥いろいろな気持ち	感情表現	どんな感じ
	⑦眠った顔	運動(状態)表現と空間形式	どうなるの
	⑧たくましい顔	感覚描写	どういうこと
	⑨味	感覚描写と形式(対照)	どう違う
たまねぎ	⑩苗を植える	運動表現	どうなっているの
	⑪水を浴びる	構成と処理	どうすればいい
	⑫お日様の光を浴びる	劇的な構成と処理	どうなるの
	⑬たまねぎが大きくなる	運動表現と空間形式	どんなふうになったの
	⑭収穫されたたまねぎ	空間形式	どうなっちゃうの

各テーマにおいて、いくつかの場面が展開されたため、その場面を「題材」とした。その題材において、保育者が表現のねらいとした内容をモチーフとした。モチーフは、邦⁷⁾による「舞踊美」に依拠した。舞踊美とは、作品を志向する条件であり、舞踊学習（身体表現活動）の内容を具体化する要素とされる。感情表現、感覚表現、思想表現、運動表現、構成と処理（時間的な展開、時間性）、空間形式（空間性）の 6 つに分類される。なお思想表現のモチーフは、幼児期の題材として発達の適切でないとされており、本研究においてもみられなかった。

また、保育者はそのモチーフをどのように具体化し援助しようとしたのかという点に着目するために、保育者が用いた言葉掛けのなかで、子どもの表現を促す言葉を抽出し「言葉掛けのキーワード」とした。例えば、①干からびたカエルでは「(前略) カエルに変身ほーい、さあ、みんな、そこらじゅうで干からびたカエルがいました。干からびたカエルはどんなふうになるの、干からびてカリカリ、

どんなふうになるの（後略）」からは「どんなふうになるの」を抽出した。

2. 対象児の特性

a. 身体表現を捉える観点（表2）

表2 身体表現を捉える観点

項目	具体的な観点	得点の基準
① イメージの具体化	題材へのイメージを具体的に表現している。 なりきって表現している。	3: 明確なイメージをもってなりきって表現している 2: イメージを漠然ともってなりきろうとしている 1: イメージがもてず、なりきれていない
② イメージの独自さ	他の子どもが思いつかない独自の表現をしている。	3: たいへん独特である 2: 他の子どもの模倣ではないが一般的である 1: 他の子どもの模倣である、またはイメージを持っていない
③ 動きの多様さ	動きの種類 身体の使い方 表情 雰囲気味わいや現し	3: 2種類以上の動き、のびのびと大きく動かす、表情が豊か、 雰囲気を楽しんでいる。 2: 2種類の動き、日常の範囲内の動き、表情がある、 雰囲気に沿っている 1: (1種類以下の動き)、ごこちない動き、表情が乏しい、 雰囲気に沿っていない
④ 動きの変化	速度や方向の変化 複合的な動きでの表現 動きの繰り返し	3: たいへんよくできている 2: できている 1: できていない
⑤ 動きの確かさ	表現したいと思う動きを 体全体や細部を使って意 識的に行っている。	3: たいへん意識的にできている 2: 意識的にできている 1: できていない

鈴木⁸⁾の示した「身体表現を捉える観点」（以降、身体表現観点）の項目と基準に依拠した。ただし、本研究においては、ひとつのテーマをさらに分類して題材としたため、短いひとつの題材に対して「動きの多様さ」を動きの種類のみで評価することが困難であった。そこで、動きの種類だけではなく身体の使い方や、表情、雰囲気などを観点に含めた。また「動きの変化」でも、同様の理由で、動きの緩急、速度の変化、方向の変化がすべて用いられていることはなく、どれか1つでも該当すれば、その程度によって評価した。また「手を身体の前に出しながら飛び跳ねる」動きは、2種類の動き（動きの多様さ）と捉えず、身体の部位を複数用いた複合的な動きとして「動きの変化」の観点で評価することとした。評価は、収録した映像を用いて、対象児1人ずつに対して題材別に行った。はじめに3テーマ×基礎力別に9名の幼児を抽出し、評価者A、Bが別々に評価し、その後、合議によって評価観点や基準を確認した。それ以降は、評価者Aが行い、確定しにくい場合のみ合議した。

b. 性：男児、女児

c. 身体表現基礎力

対象児の行動特性や傾向を理解し、どのような子どもにとってどのような題材やモチーフが適切なのか考察するために、身体表現にかかわる基礎力を測定することとした。身体表現の基礎力として、感性与身体活動性を想定し、既存の2つの尺度「幼児期の感性尺度」⁹⁾と「子どもアクティビティ尺度」¹⁰⁾における独自の感受と創出、能的な応答、情緒的・道徳的共感、プレイ、リーダー、チャレンジ、ソーシャル因子中の18項目を抽出した。担任教員と副担任教員が、日常の生活で対象児が見せる程度を5件法で評価し、総合平均値と7要素別平均値を算出した。総合平均値を上回りかつ全要素別平均値を4要素以上上回った子どもを上位群（7名）、総合平均値を下回りかつ4要素以上下回った子どもを下位群（6名）、それ以外を中位群（16名）とした。

Ⅲ. 結果と考察

1. テーマ間の違い

テーマと身体表現観点の2要因被験者内分散分析を行った。その結果、3テーマ間には有意差がなく、身体表現観点 ($F=63.147, df=, p<0.001$)、交互作用 ($F=3.945, df=8, p<0.001$) には有意差が認められた。単純主効果の検定を行ったところ、3テーマすべてに身体表現観点間の有意差が認められた。そこで本研究では、身体表現活動のテーマの枠を外し14題材とし、身体表現観点別に分析考察することとした。

2. 身体表現観点別にみた題材・モチーフの傾向

身体表現観点別に、a. 性、b. 身体表現基礎力、c. 題材・モチーフの3要因の分散分析を行った。以下では、各観点別の分散分析表と、性別、身体表現基礎力別の題材・モチーフの平均値を図示し、身体表現観点別に題材・モチーフの傾向を考察する。

(1) イメージの具体化

表3 「イメージの具体化」における性、身体表現基礎力、題材・モチーフの分散分析

変動因	SS	df	MS	F	P	多重比較
a 性	7.756	1	7.756	9.110	0.000***	男児<女児
b 身体表現基礎力	9.983	2	4.991	5.862	0.006**	中位群>下位群, 上位群>下位群
被検者間要因 a × b	3.611	2	1.806	2.121	0.143	
誤差	19.583	23	0.851			
c 題材・モチーフ	14.643	13	1.126	3.064	0.000***	②⑥>①
被検者内要因 a × c	3.756	13	0.289	0.786	0.675	
b × c	8.144	26	0.313	0.852	0.677	
a × b × c	9.271	26	0.357	0.970	0.509	
誤差	109.017	299	0.368			

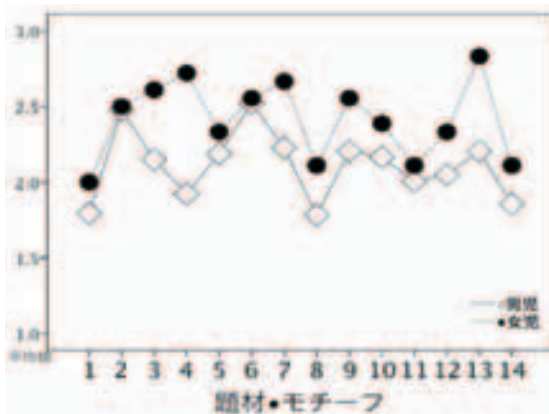


図 1-1 イメージの具体化 (性)

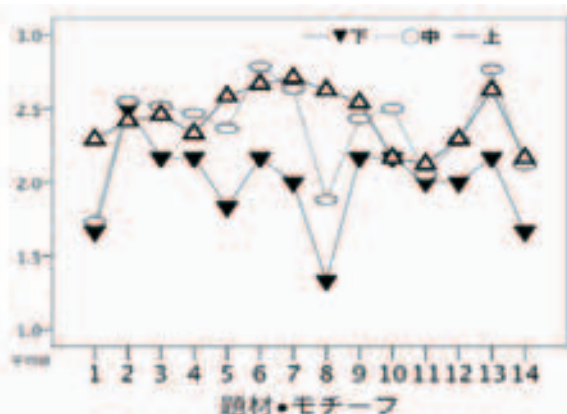


図 1-2 イメージの具体化 (身体表現基礎力)

性、身体表現基礎力、題材・モチーフの主効果がすべて有意であった。性では、女児 (2.43) が男児 (2.11) よりも有意に高く、身体表現基礎力では、下位群 (2.00) よりも中位群 (2.26) と上位群 (2.43) が有意に高い。題材・モチーフでは「①干からびたカエル・感覚描写」(1.89) よりも、「②元気なカエル・運動」(2.49)「⑥いろいろな気持ち・感情表現」(2.54) が有意に高いことが示された。

「干からびた/どんなふうに」という内容や言葉掛けを用いて感覚を描写する題材よりも、「元気/どんな動き」を用いた運動表現や、「気持ち/どんな感じ」を用いた感情表現の題材が、イメージを具体的にし、題材となった対象になりきることができる傾向が示唆された。特に女児にその傾向が顕著で

表4 「イメージの独自さ」における性、身体表現基礎力、題材・モチーフの分散分析

変動因	SS	df	MS	F	P	多重比較
a 性	2.792	1	2.792	2.753	0.111	
被検者 間要因						
b 身体表現基礎力	11.660	2	5.830	5.758	0.009**	上位群>下位群
a × b	4.765	2	2.383	2.349	0.118	
誤差	23.329	23	1.014			
c 題材・モチーフ	8.552	13	0.658	1.871	0.033*	
a × c	3.210	13	0.247	0.702	0.761	
被検者 内要因						
b × c	5.779	26	0.222	0.632	0.921	
a × b × c	11.832	26	0.455	1.294	0.158	
誤差	105.138	299	0.352			

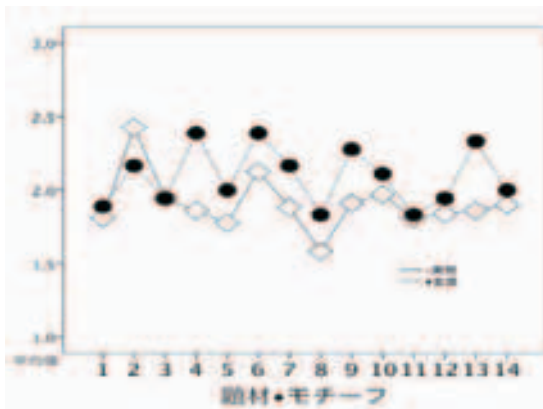


図 2-1 イメージの独自さ（性）

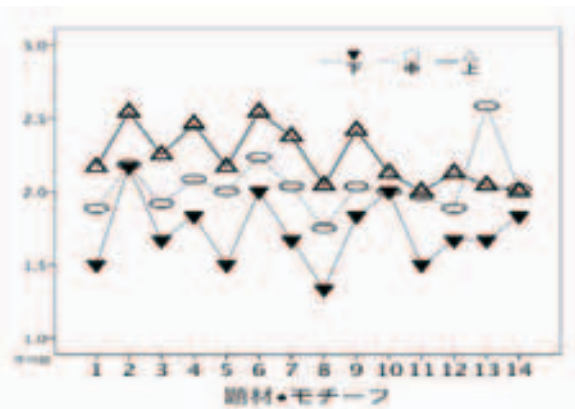


図 2-2 イメージの独自さ（身体表現基礎力）

あった。

(2) イメージの独自性

身体表現基礎力、題材・モチーフの主効果が有意であった。身体表現基礎力では、上位群（2.23）が下位群（1.73）よりも有意に高い。題材・モチーフでは、「②元気なカエル・運動」（2.30）が、「⑧たくましい顔・感覚描写」（1.71）、「⑪水を浴びる・構成的な処理」（1.82）より高く、「⑥いろいろな気持ち・感情表現」（2.26）が、「⑧たくましい顔・感覚描写」（1.71）よりも高い傾向が示されたが、有意差の認められる題材・モチーフ間にはなかった（ $p=.21$, $p=.19$, $p=.10$ ）。

「元気/どんな動き」という内容や言葉掛けを用いた運動表現の題材が、「たくましい/どうということ」という感覚描写や、「水を浴びる/どうすればいい」という構成と処理の題材よりも高くなる傾向と、「気持ち/どんな感じ」という感情表現の題材が、「たくましい/どうということ」を用いた感覚描写の題材よりも、一人一人のイメージに違いが現れやすいことが示唆された。

イメージの独自性は、5観点中では最も平均値が低く、性差が認められなかった。女兒において他の4観点よりも低くなる傾向がみられ、また身体表現基礎力上位群や中位群の平均値が他の4観点よりも顕著に低くなる傾向がみられた。他の観点では高い得点を得られる子どもが、独自さという点では低くなり、そのことが全体の平均値を低くしたと考えられる。イメージを独自にすることは、5歳児において性を問わず、また基礎力の高い子どもにとっても、また題材・モチーフの違いにかかわらず、難易度の高い表現要素であることが示された。

(3) 動きの多様さ

性、身体表現基礎力、題材・モチーフの主効果がすべて有意であった。また性と基礎力の交互作用

表5 「動きの多様さ」における性、身体表現基礎力、題材・モチーフの分散分析

変動因	SS	df	MS	F	P	多重比較
a 性	9.056	1	9.056	17.468	0.000***	
b 身体表現基礎力	9.056	2	3.688	7.114	0.004**	
a × b	3.593	2	1.797	3.466	0.048*	下位群：女児＞男児，中位群：女児＞男児 男児：高位群，中位群＞下位群
誤差	23.329	23	1.014			
c 題材・モチーフ	16.818	13	1.294	4.771	0.000*	②＞①③⑧⑪，⑥＞①⑪
a × c	3.245	13	0.250	0.920	0.532	
b × c	8.060	26	0.310	1.143	0.291	
a × b × c	8.737	26	0.336	1.239	0.199	
誤差	81.076	299	0.271			

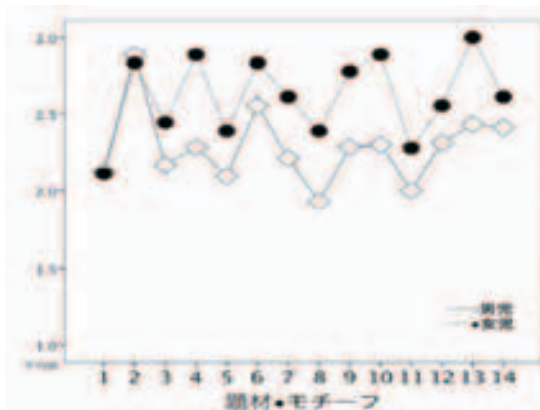


図 3-1 動きの多様さ（性）

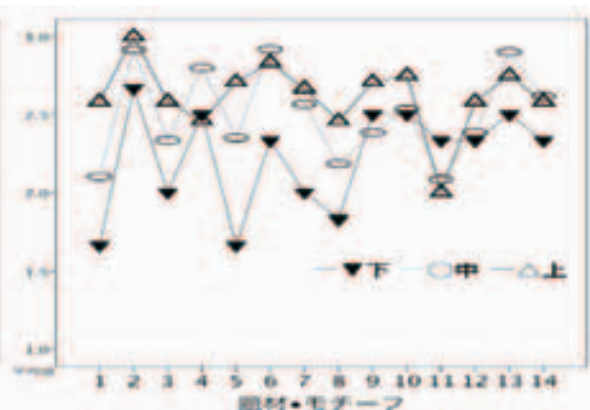


図 3-2 動きの多様さ（身体表現基礎力）

が有意であった。単純主効果の検定の結果、男児において下位群（1.91）よりも中位群（2.38）と高位群（2.57）が有意に高く、身体表現基礎力では、下位群と中位群において、男児（1.91,2.38）よりも女児（2.55,2.63）が有意に高いことが示された。題材・モチーフでは、「②元気なカエル・運動」（2.86）が、「①干からびたカエル・感覚描写」（2.12）、「③干からびたカタツムリ・構成と処理」（2.31）、「⑧たくましい顔・感覚描写」（2.16）、「⑪水を浴びる・構成と処理（2.14）よりも有意に高い。また「⑥いろいろな気持ち・感情表現」（2.69）が、「①干からびたカエル・感覚描写」（2.12）、「⑪水を浴びる・構成と処理」（2.14）よりも有意に高いことが示された。

「元気/どんな動き」という内容や言葉掛けを用いた運動表現が、「干からびた/どんなふうになるの」、「たくましい/どういふこと」を用いた感覚描写よりも動きを多様にすることが示唆された。また「気持ち/どんな感じ」という内容や言葉掛けを用いた感情表現が、「干からびた/どんなふうになるの」を用いた感覚表現、「水を浴びる/どうすればいい」を用いた構成と処理よりも動きを多様にすることも示唆され、運動表現、感情表現、感覚表現、構成と処理の順に、動きの多様さを実現する題材・モチーフの難易度が高まるのではないかと推察された。また、女児では身体表現基礎力の差が、動きの多様さの実現に影響を及ぼしにくい傾向がみられた。

（4）動きの変化

性、身体表現基礎力、題材・モチーフの主効果がすべて有意であった。また性と基礎力の交互作用が有意であった。単純主効果の検定の結果、男児において下位群（1.88）よりも、中位群（2.42）と高位群（2.43）が有意に高く、身体表現基礎力では、下位群と中位群において、男児（2.42,2.42）よりも女児（2.57,2.69）が有意に高かった。題材・モチーフでは、「②元気なカエル・運動表現」（2.92）

表6 「動きの変化」における性、身体表現基礎力、題材・モチーフの分散分析

変動因	SS	df	MS	F	P	多重比較
a 性	9.363	1	9.056	17.573	0.000***	
b 身体表現基礎力	5.173	2	2.586	4.854	0.017**	
a × b	6.074	2	3.037	5.700	0.010**	下位群：女児>男児 男児：高位群, 中位群>下位群
誤差	23.329	23	1.014			
c 題材・モチーフ	25.191	13	1.938	5.928	0.000*	②>①③⑤⑧⑨⑪⑫, ④⑬>③, ⑥>③⑧
a × c	6.364	13	0.490	1.497	0.117	
b × c	6.614	26	0.254	0.778	0.775	
a × b × c	11.967	26	0.460	1.408	0.094	
誤差	97.745	299	0.327			

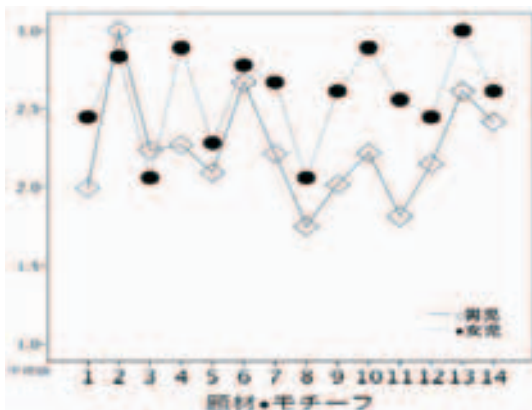


図 4-1 動きの変化（性）

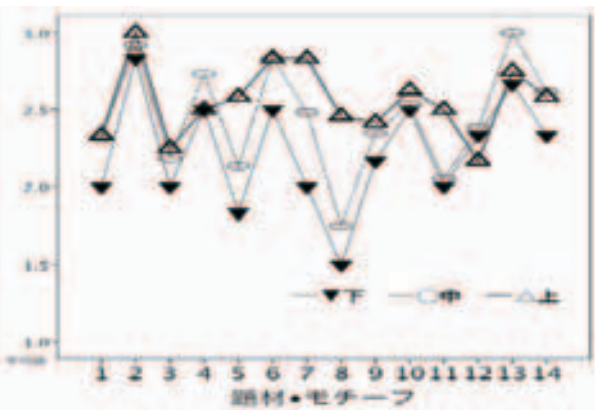


図 4-2 動きの変化（身体表現基礎力）

が、「①干からびたカエル・感覚描写」(2.22)「③干からびたカタツムリ・構成と処理」(2.14)「⑤顔のパーツ・空間形式と運動表現」(2.18)「⑧たくましい顔/感覚描写」(1.90)「⑨味・感覚描写と形式（対照）」(2.31)「⑪水を浴びる・構成と処理」(2.18)「⑫お日様の光を浴びる・劇的な構成と処理」(2.29) よりも高かった。また「③干からびたカタツムリ・構成と処理」(2.14) よりも、「④元気なカタツムリ・運動表現」(2.58) と「⑬たまねぎが大きくなる・運動表現と空間形式」(2.80) が高く、「⑥いろいろな気持ち・感情表現」(2.72) が、③干からびたカタツムリ・構成と処理」(2.14) と ⑧たくましい顔・感覚描写」(1.90) よりも高いことが示された。

「元気/どんな動き」という内容や言葉掛けを用いた運動表現が、「干からびた/どんなふうになるの」や「たくましい/どういふこと」を用いた感覚描写よりも、また「味覚/どう違う」を用いた感覚描写と形式（対照）、「顔のパーツ/どんな形なの」を用いた空間形式と運動表現、「干からびた/どんなふうになったの」や「水を浴びる/どうすればいい」を用いた構成と処理、「光を浴びる/どうなるの」を用いた劇的な構成と処理」の題材よりも動きの変化を促進させることが示された。さらに、「干からびた/どんなふうになったの」を用いた構成と処理よりも、「元気/どうするの」「大きくなる/どんなふうになったの」を用いた運動表現と空間形式の題材が、「気持ち/どんな感じ」を用いた感情表現が、「干からびた/どんなふうになったの」を用いた構成と処理「たくましい・どういふこと」を用いた感覚描写の題材よりも動きの変化を促進させることが示された。以上から、運動表現や感情表現をモチーフとした題材は、運動の変化が生まれやすいことが示唆された。それらに比べて感覚描写、構成と処理、空間形式などのモチーフは難易度が高く、モチーフ間の差は題材の性質に由来することが示唆された。

表7 「動きの確かさ」における性、身体表現基礎力、題材・モチーフの分散分析

変動因	SS	df	MS	F	P	多重比較
a 性	15.430	1	15.430	14.660	0.000***	女児>男児
b 身体表現基礎力	12.973	2	6.587	6.163	0.007**	中位群>下位群, 上位群>下位群
被検者間要因 a × b	4.839	2	2.419	2.299	0.124	
誤差	23.329	23	1.014			
c 題材・モチーフ	15.988	13	15.988	3.240	0.000*	②>①
a × c	3.936	13	303.000	0.798	0.663	
b × c	7.841	26	0.302	0.794	0.754	
被検者内要因 a × b × c	8.999	26	0.346	0.912	0.592	
誤差	97.745	299	0.327			

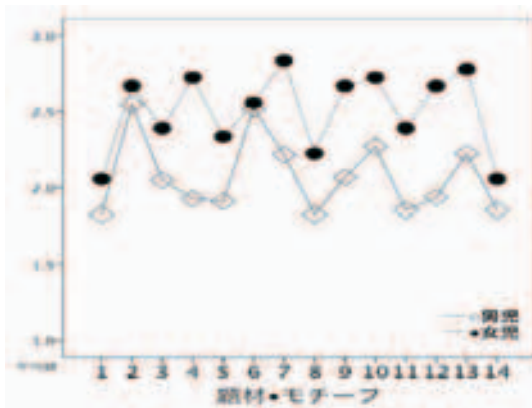


図 5-1 動きの確かさ (性)

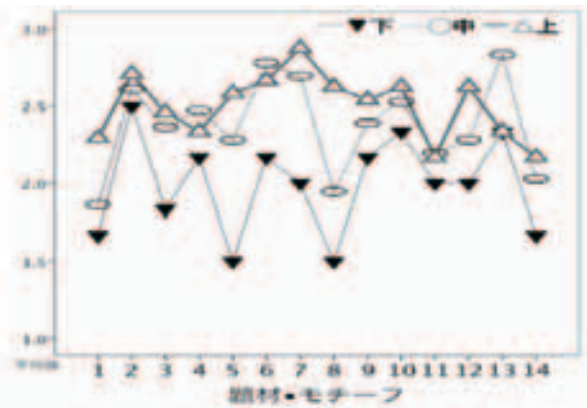


図 5-2 動きの確かさ (身体表現基礎力)

(4) 動きの確かさ

性、身体表現基礎力、題材・モチーフの主効果がすべて有意であった。性では、女児 (2.50) が男児 (2.10) よりも有意に高く、身体表現基礎力では、下位群 (1.99) よりも中位群 (2.38) と上位群 (2.50) が有意に高い。題材・モチーフでは、「②元気なカエル・運動」(2.61) が「①干からびたカエル・感覚描写」(1.94) よりも有意に高いことが示された。

「干からびた/どんなふうに」という内容や言葉掛けを用いて感覚を描写する題材よりも、「元気/どんな動き」を用いた運動表現が、動きを意識的にするモチーフとなる傾向が示唆された。特に女児にその傾向が顕著であった。

3. 身体表現観点平均値の高低からみた題材・モチーフの傾向

身体表現観点別に平均値の高い題材・モチーフ、低い題材・モチーフを順位付けしたところ、表 8 に示す結果がみられた。この結果から考察される内容は以下のようにまとめられる。

まず、平均値高低共に、カタツムリ、顔、たまねぎの 3 つのテーマにおける題材がみられ、テーマ間に有意差がなかった分散分析の結果が、内容的に裏付けられた。1 つのテーマの中に様々な題材が盛り込まれることによって、テーマ全体として均一化する様子が捉えられ、また 3 つのテーマは、本対象児の発達に対してほぼ同水準のテーマであったことが示唆された。

平均値の上位にみられたモチーフは、運動表現、感情表現であった。動きの多様さや変化といった動きの 2 要素では、身体表現基礎力の高低に関らず高い平均値となる題材・モチーフ (元気なカエル: 運動表現、たまねぎが大きくなる: 運動表現と空間形式、いろいろな気持ち: 感情表現) がみられたが、イメージの 2 要素と動きの確かさでは身体表現基礎力の上位群のみが高得点となる傾向がみられ

表 8 身体表現観点別にみた平均値の高い題材モチーフと低い題材モチーフ

平均値上位									平均値下位								
	順	題 材	モチーフ	言葉掛けの キーワード	性	基礎力	均	SD		順	題材	モチーフ	言葉掛けの キーワード	性	基礎	均	SD
イ メ ー ジ の 具 体 化	1	⑥顔：いろいろな気持ち	感情表現	どんな感じ	男	上	3.00	0.00	1	⑧顔：たくましい顔	感覚描写	どういこと	男	下	1.00	0.00	
		⑧顔：たくましい顔	感覚描写	どういこと	女	上				2	③カ：干からびたカタツムリ	感覚描写	どんなふうになるの	男	下	1.33	0.58
		⑬玉：たまねぎが大きくなる	運動表現	どんなふうになったの	女	上					⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どうなるの	男	下		
	2	⑥顔：いろいろな気持ち	感情表現	どんな感じ	男	中	2.90	0.32									
イ メ ー ジ の 独 自 さ	1	②カ：元気なカエル	運動表現	どんな動きをするの	男	上	2.75	0.50	1	⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どうなるの	男	下	1.00	0.00	
		⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どう違う	男	上				⑧顔：たくましい顔	感覚描写	どういこと	男	下			
		⑥顔：いろいろな気持ち	感情表現	どんな感じ	男	上				3	①カ：干からびたカエル	感覚描写	どんなふうになるの	男	下	1.33	0.58
動 き の 多 様 さ	1	②カ：元気なカエル	運動表現	どんな動きをするの	男	上中	3.00	0.00	1	⑤顔：顔のパーツ	運動表現と空間形式	どんな形なの	男	下	1.33	0.58	
					女	上				⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どうなるの	男	下			
		④カ：元気なカタツムリ	運動表現	どうするの	女	中下				⑧顔：たくましい顔	感覚描写	どういこと	男	下			
		⑤顔：顔のパーツ	運動表現と空間形式	どう違う	女	下											
		⑥顔：いろいろな気持ち	感情表現	どんな感じ	男	中											
				女	下												
		⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どう違う	男	上											
		⑩玉：苗を植える	運動表現	どうなってるの	女	上 下											
		⑬玉：たまねぎが大きくなる	運動表現	どんなふうになったの	女	上中下											
動 き の 変 化	1	②カ：元気なカエル	運動表現	どんな動きをするの	男	上中下	3.00	0.00	1	⑧顔：たくましい顔	感覚描写	どういこと	男	下	1.00	0.00	
		④カ：元気なカタツムリ	運動表現	どうするの	女	上 下				2	⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どうなるの	男	下	1.33	0.58
		⑤顔：顔のパーツ	運動表現と空間形式	どう違う	女	下					⑨顔：味	感覚描写と形式/対照	どう違う	男	下		
		⑥顔：いろいろな気持ち	感情表現	どんな感じ	女	下				⑪玉：水を浴びる	構成処理	どうすればいい	男	下			
		⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どうなるの	男	上											
		⑩玉：苗を植える	運動表現	どうなってるの	女	上											
		⑪玉：水を浴びる	構成処理	どうすればいい	女	上											
		⑬玉：たまねぎが大きくなる	運動表現	どんなふうになったの	男	中											
				女	上中下												
		動 き の 確 か さ	1	②カ：元気なカエル	運動表現	どんな動きをするの	男	上		2.75	0.50	1	⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式	どうなるの	男	下
⑥顔：いろいろな気持ち	感情表現			どんな感じ	男	上			⑧顔：たくましい顔	感覚描写	どういこと		男	下			
⑦顔：眠った顔	運動表現と空間形式			どうなるの	男	上											

た。幼児はイメージ想起の段階でのつまずきが大人に比べて少ないと言われている¹¹⁾が、身体表現活動においてイメージを膨らませて、それを表現的な動きへと自ら意識的に結びつけていく営みにおいては、5歳児に対しても一定の支援が必要なが示唆された。また動きの観点をモチーフとして強調できる題材が、イメージを強調する題材よりも表現の難易度が下がることが推察された。

一方、平均値の下位にみられた題材・モチーフは、たくましい顔：感覚描写、眠った顔：運動表現と空間形式、水を浴びる：構成と処理であった。「どういこと」や「どうすればいい」といった言葉掛けにみられるように、子どもにとって目の前にないものを想像したり、そこから次に起こることやその原因を推察したりする題材・モチーフは、難易度が高くなると考えられる。

また「眠った顔」の題材・モチーフは、特にイメージの具体化において、身体表現基礎力の差が生

まれていた。その原因として、「眠った顔：どうなるの」という題材・モチーフに対する受け止め方が異なる様子がみられた。身体表現基礎力上位群では、「眠る」という題材を、読みきかせでの絵本のなかに描かれていた眠る表情をもとに、それをどのように動きにするかを考え工夫している様子がみられ、結果として運動表現と空間形式というモチーフの実現に就いていた。それに対して、身体表現基礎力下位低群では、他児につられるように所在なさそうに床に横臥するに留まる様子がみられた。同様に「味：感覚描写と形式」では、甘い辛い「どう違う」と対照的に考えさせる言葉掛けに対して、身体表現基礎力上位群では、動き方としての違いを考えて表現していたのに対して、身体表現基礎力下位群では、他児の様子を見まわしているものの、結果的に何をしているのかが理解できていない様子であった。想像力とは、現在あるいは以前の感覚的認識からイメージを形成する能力であるとされる¹²⁾が、一方で体験の少ない子どもが身体で何かを表現する場合には、体験から得た感覚、言い換えれば「体感」として持っている部分が少ないために、その感覚をもとに対象を描写し想像することが難しいと考えられた。

VI. 全体考察

本研究では、幼児期の身体表現活動を援助する基礎資料を得るために、5歳児における身体表現に適した題材を検討することを試みた。実際に行われた身体表現活動における個人の表現を対象として、性、身体表現を行うための基礎的な力、各題材における身体表現を捉える5つの評価点を要因とし、題材とモチーフ（保育者の表現のねらい）間の差や違いを量的な分析を中心に考察した。

その考察をもとに、5歳児に

における身体表現活動に適した題材を、身体表現活動を捉える観点としてのイメージ（イメージの膨らみやすさ）と動き（動きの現しやすさ）の軸を用いて「題材・モチーフの難易度」として図示した（図6）。運動表現モチーフは、イメージを膨らませることは容易であり動きに現すことは比較的容易である。感情表現モチーフはイメージを膨らませることは比較的容易であり動きに現すことは容易である。それに対して、感覚描写モチーフはイメージがかなり膨らませにくく運動も現しにくい。空間形式モチーフはイメージが膨らませにくく運動もたいへん現しにくい。また題材による違いも見られる。構成と処理モチーフは、運動表現モチーフと感情表現モチーフとはやや距離があり個人差も出やすい。

運動表現モチーフ、感情表現モチーフ、感覚描写モチーフは、主に「何を表すか」を焦点としたモチーフであり、それに対して構成と処理、空間形式モチーフは「どのように」を焦点としている。運動表現モチーフ、感情表現モチーフは、5歳児にとって比較的容易モチーフに「何を」をイメージしやすく、それを運動に現すことが直接的に結びつくと考えられ難易度が低い。それに対して感覚描写モチーフでは、「何を」を理解することや理解の仕方に個人差や違いが生じやすく、イメージと動き

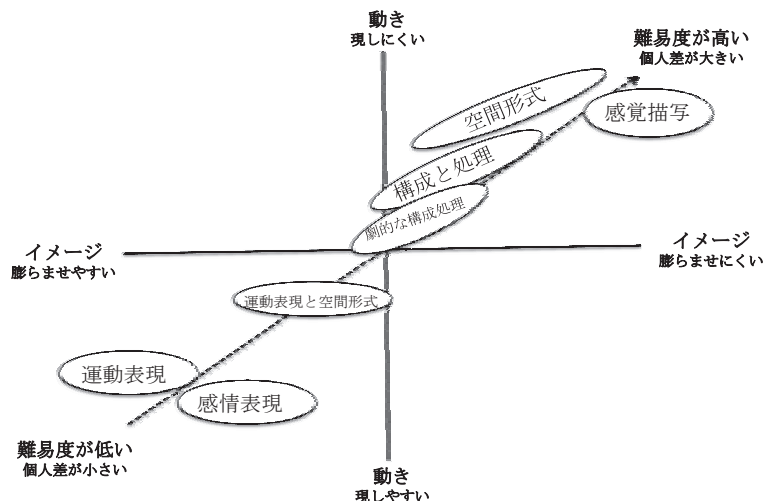


図6 5歳児の身体表現活動における題材・モチーフの難易度

が相互的に作用しにくいために難易度が高まる。また、「どのように」という表現の仕方を焦点とした場合には、構成と処理モチーフのような時間性、空間形式のような空間性をイメージしやすい題材であるかどうかによって難易度に差が生まれる。

しかし、難易度の高い題材・モチーフであっても、ひとつのテーマのなかに、難易度の低い題材・モチーフとを混在させることで、文脈を通して題材への理解が進んだり、他児からの影響によってモチーフに気づいたりすることもある。指導者はテーマのなかでの題材・モチーフの展開の順序に配慮すれば、5歳児なりの表現が可能になることも示唆された。

本研究では、各題材における身体表現を捉える5つの観点をを用いて、幼児の表現内容を量的に捉えることによって題材の難易度を測定した。このような題材・モチーフの難易度を、子どもの発達に照らした指導者の表現活動のねらいの設定の指標とし、活動の展開を組み立て、活動後には評価の観点として活用していきたい。今後は、表現の質や個性に着目することによって、適した言葉掛けなどを含めた支援方法を具体化することに努めたい。

引用文献

- 1) 柴絃子、柴真理子（1981）新音楽リズム動きの表現ハンドブック 星の環会、35
 - 2) 池田裕恵・三原みどり（1987）「幼児期にふさわしい身体表現活動の題材」湘北紀要 8、39-46
 - 3) 高野牧子、小田ひとみ（2003）線画を題材とした幼児の身体表現、山梨県立女子短期大学紀要（36）、93-99
 - 4) 小松恵里子、宮嶋郁恵、小川鮎子、青木理子（2011）「うさぎ」を題材とした身体表現の効果的指導方法の研究 3：画像分析的手法を用いて、鹿児島女子短期大学紀要 46、141-152
 - 5) 西洋子、本山益子、鈴木裕子、吉川京子（2003）子ども・からだ・表現、市村出版、13-21
 - 6) 古市久子（1998）『ガリバー旅行記』に学ぶ表現的行動、大阪教育大学紀要 第IV部門：教育科学、95-109
 - 7) 邦正美（1981）舞踊の美学、富山房、65-70
 - 8) 鈴木裕子、西洋子、本山益子、吉川京子（2002）幼児期における身体表現の特徴と援助の視点 舞踊學25、23-31
 - 9) 鈴木裕子（2009）幼児の感性を具体化する試み：幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして、保育学研究 47（2）、132-142
 - 10) 鈴木裕子（2005）幼児の身体活動評価尺度の開発：子どもアクティビティ尺度、体育學研究 50（5）、557-568
 - 11) 黒川建一・小林美実（1990）保育内容・表現、建帛社、6
 - 12) ジョンソン・マーク、菅野 盾樹・中村 雅之（訳）（1991）心のなかの身体・想像力へのパラダイム変換、紀伊國屋書店、304-329
- 付記：本稿は、竹内和氏の2014年度幼児教育選修卒業研究における資料の一部をもとに、新たな視点で分析考察を行った。資料の提供を深謝いたします。